

心を“くすぐる”コンプリメントに関する臨床心理学的研究

～居心地と問題のとらえ方の変化に焦点をあてて～

心理臨床学専攻 丸 田 なつき

I. 問題と目的

本研究では、個人の認識をより肯定的な現実へと促しうるコミュニケーションとして、家族療法の中でも特にソリューション・フォーカスト・アプローチにおいて重要とされているコンプリメントを活用したことば掛けを現実構成主義の視点から検討していきたい。コンプリメントにおいては強力な介入の一つとされているが、その実証的研究や、コンプリメントの工夫についての研究はほとんどされていない。また例えば、本間（2006）によって指摘されているように、不登校者・引きこもり者に対する積極的な励ましや賞賛といった肯定の繰り返しは、不信や疑念を深めることになりかねないとされている。このことから、コンプリメントには特に慎重な工夫が必要であると思われる。そこで本研究では、その工夫の一つとして、有効な介入の条件として挙げられる「小さくて受け入れやすくおもしろい」（長谷川，2005）を満たすコンプリメントを目指し，“くすぐり”を提案し検討する。なお、くすぐりを本研究では「自身では肯定しがたい現実の中にリソースを見出すことによるコンプリメント」と定義する。

II. 仮説

1. くすぐられたと感じた人はくすぐられたと感じなかった人に比べて、居心地や問題の捉え方によりよい変化がもたらされるだろう。
2. くすぐりのことば掛けは他のことば掛けと比べ、くすぐられたと感じられるものであり、くすぐりのことば掛けは他のことば掛けよりも、居心地の変化や問題の認知によりよい影響をもたらすだろう。

III. 方法

目的に沿って質問紙調査を行った。

- 1) 被検者：大学生計274名
- 2) 調査時期：（本調査）2008年11月～12月
- 3) 質問紙の構成：①フェイスシート（性別・年齢）②ある学校不適応生徒の状況説明3場面

（個人間要因：友達ができない生徒・勉強についていけない生徒・理解が得られない非行少年）③生徒のその後の居心地について尋ねる「居心地尺度」（17項目）④生徒に対する教師からのことば掛け3種類（個人内要因：くすぐり、伝え返し、社会的規範の代弁（以下、代弁））⑤3種類のことば掛け後それぞれ（順序効果を考慮しカウンターバランスをとっている）の「居心地尺度」「問題認知の変化尺度」（30項目）「くすぐられ認知尺度」（18項目）⑥自由記述

IV. 結果

分析① - 1) くすぐられ認知の因子構造の把握と

独立変数の分類

各質問紙における最初のことば掛け後のくすぐられ認知尺度18項目について因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行なった結果、解釈可能性からくすぐられ因子（ $\alpha=.89$ ）、否定感因子（ $\alpha=.85$ ）、現状肯定感因子（ $\alpha=.82$ ）の3因子が抽出された。以上の結果から各因子の下位尺度得点を算出し、くすぐり因子が5割以上かつ、否定感因子が5割以下かつ、新しい見方の獲得因子が5割以上を満たすものをくすぐられ群、くすぐり因子が5割以下かつ、否定感因子が5割以上かつ、新しい見方の獲得因子が5割以下を満たすものを非くすぐられ群とした。

分析① - 2) 居心地尺度の因子構造の把握と問題

認知尺度の因子構造の確認

状況説明後の居心地尺度17項目について因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った結果、解釈可能性からリラックス因子（ $\alpha=.89$ ）、好意因子（ $\alpha=.88$ ）、成長因子（ $\alpha=.80$ ）、安心因子（ $\alpha=.57$ ）の4因子が抽出された。問題認知の変化尺度は廣邊ら（2004）によって、解決可能性の発見因子（ $\alpha=.95$ ）、問題からの開放感因子（ $\alpha=.93$ ）、問題の悪化（ $\alpha=.78$ ）、問題の軽視因子（ $\alpha=.66$ ）の4因子にまとめられている。

分析① - 3) それぞれのことば掛け後の居心地と

問題認知の変化についての群間（くすぐられ群と非くすぐられ群）の比較

くすぐりのことば掛について、リラックス因子・好意因子・成長因子の3因子 ($t(118) = 6.23, p < .001$; $t(118) = 6.66, p < .001$; $t(118) = 5.33, p < .001$) に加え、解決可能性の発見因子・問題からの開放感因子の2因子 ($t(118) = 8.80, p < .001$; $t(118) = 10.67, p < .001$) において、くすぐられ群がいずれも0.1%水準で有意に高く、安心因子 ($t(118) = 2.86, p < .05$) においても5%水準で有意に高いという結果となった。また問題の軽視因子 ($t(118) = 1.74, p < .10$) においても10%水準で有意に高い傾向が示された。問題の悪化因子 ($t(118) = 4.34, p < .001$) においては、非くすぐられ群が0.1%水準で有意に高いという結果となった。

次に、伝え返しのことば掛について、リラックス因子・好意因子・成長因子の3因子 ($t(76) = 6.73, p < .001$; $t(76) = 6.77, p < .001$; $t(76) = 6.58, p < .001$) に加え、解決可能性の発見因子・問題からの開放感因子の2因子 ($t(58.50) = 11.25, p < .001$; $t(76) = 15.51, p < .001$) においてくすぐられ群がいずれも0.1%水準で有意に高く、また安心因子 ($t(76) = 3.37, p < .01$) においても1%水準で、問題の軽視因子 ($t(76) = 3.50, p < .05$) においても5%水準で有意に高いという結果となっている。また問題の悪化因子 ($t(76) = 6.85, p < .001$) においては、非くすぐられ群が0.1%水準で有意に高いという結果となった。

代弁のことば掛については、リラックス因子・好意因子・成長因子の3因子 ($t(113) = 4.57, p < .001$; $t(113) = 5.51, p < .001$; $t(113) = 6.33, p < .001$) に加え、解決可能性の発見因子・問題からの開放感因子の2因子 ($t(113) = 7.85, p < .001$; $t(113) = 10.54, p < .001$) において、くすぐられ群いずれも0.1%水準で有意に高く、また安心因子 ($t(113) = 2.81, p < .01$)、問題の軽視因子 ($t(113) = 2.53, p < .01$) においても1%水準で有意に高いという結果となった。また問題の悪化因子 ($t(113) = 4.33, p < .001$) においては、非くすぐられ群が0.1%水準で有意に高いという結果となった。

分析② - 1) くすぐられ認知についてのことば掛間の比較（一元配置分散分析）

分散分析の結果、ことば掛の間の差は0.1%水準で有意であった ($F(2, 723) = 136.36, p < .001$)。多重比較を行ったところ、くすぐりのことば掛が他のことば掛と比べて有意に得点が高かった。

分析② - 2) 居心地についてのことば掛前と各ことば掛間の比較（一元配置分散分析）

分散分析の結果、居心地のリラックス因子 ($F(3, 956) = 42.96, p < .001$)、好意因子 ($F(3, 956) = 34.90, p < .001$)、成長因子 ($F(3, 956) = 30.96, p < .001$)、安心因子 ($F(3, 956) = 25.12, p < .001$) すべてにおいて、0.1%水準で有意であった。そこで多重比較を行ったところ、リラックス因子、好意因子、成長因子でくすぐりのことば掛が他と比べて有意に得点が高く、安心因子では、くすぐりと伝え返しのことば掛が他と比べて有意に高かった。

分析② - 3) 問題認知の変化についてのことば掛間の比較（一元配置分散分析）

分散分析の結果、解決可能性の発見因子 ($F(2, 687) = 29.53, p < .001$)、問題からの開放感因子 ($F(2, 687) = 70.48, p < .001$)、問題の悪化因子 ($F(2, 687) = 91.83, p < .001$)、問題の軽視因子 ($F(2, 687) = 12.75, p < .001$) すべてにおいて、0.1%水準で有意であった。多重比較を行ったところ、くすぐりのことば掛が他と比べて、解決可能性の発見因子と問題からの開放感因子で有意に高く、問題の悪化因子では有意に低かった。また、問題の軽視因子では、くすぐりと伝え返しのことが掛が、他と比べて有意に高かった。

V. 考察

以上の結果から仮説は支持された。個人が抱えている否定的な現実と隙間を空け、肯定的な現実へと促すコンプリメントの工夫として“くすぐり”の可能性が期待できると思われる。今のままの自分を何よりも大切にし、かつ受け入れやすさがあり、小さくて大きい介入といえるだろう。

<引用文献>

- 長谷川啓三 (2005) ソリューション・バンク グリーフセラピーの哲学と新展開 金子書房。
 本間友己 (2006) 居場所とは何か―不登校・ひきこもりへの視座 忠井俊明・本間友己 編著 不登校・ひきこもりと居場所 ミネルヴァ書房, 2 - 25